

～医療生協健文会の職員のみなさま～

メロス通信



Vol.07

2023年5月号

発行：地域福祉室

不定期便

医学生が泣いた…

ある患者さんの言葉



Aさんから「お金がなくて夫の糖尿病の治療ができない」ことを相談されて1年が経ちました。ご主人は仕事上の事故で足を骨折し、労災として無料で手術を受けることができましたが、医療費のかかる持病の糖尿病の治療はできませんでした。しかし主治医から「このまま血糖値が悪いのを放置したら足を切断しないといけなくなるかもしれない」といわれ、たまたま受診した協立病院で無料低額診療のチラシを目にします。藁をもつかむ気持ちで無料低額診療を申し込みました。

Aさんは子どもとの4人家族で貧困からずっと抜け出すことができませんでした。Aさん自身も肥大した甲状腺で気道が閉塞するまでバセドウ病の治療ができませんでした。生活保護を受けた時期もありましたが、世帯の収入が少しでも増えると市から生活保護終了の圧力がかかります。生活保護を終了してもなお苦しい生活が続いていきました。そして家族を心配させてはいけないと必死に元気をふるまっていたAさんでしたが、あるとき悲しみがあふれ出し精神科を受診するようになります。



< 緒方の言葉 >

～ 燕のはなし～

地域福祉室 メロス 緒方弘征

家の納屋に、今年も燕が巣を作りました。お陰で、燕の糞が床に自動車にとあちこちに毎日落ちています。まったく困りものです。車を拭いても、拭いても、翌朝には糞がこびりついていきます。どうしたものかと燕をしばらく観察することにしました。しかし、まあ、燕はよく動き回っています。燕について興味が湧いてきました。燕についての本を読むと、親燕は、一時間に**40回**、一日**13時間**も飛び回り、約**800匹**の虫を捕まえ、子どもたちに**500匹**を食べさせ、自らも**200～300**の虫を食べるそうです。

これを知ってからというもの、燕を応援するようになりました。

糞で汚れた車を拭くのもなんとなく燕を許せる気持ちが湧いてきました。今は、産まれたばかりの子燕が無事育ち巣立つように、たくさんの虫を食べて、その分うんこも出しておくれという気持ちです。



「**一つでも話すことができます。**」
そうすれば、言えなかった**十のこと**の

「**心にひとつでもいい、
優しさの種をうえてください。**」

無料低額診療は受療権を守るだけのものではありません。病気の治療だけでは患者さんのニーズの一部にしか応えられません。無料低額診療というつながりを通して、生活全体にわたって患者さん自身の生きる力を引き出していくものです。現在Aさんはご家族と地域福祉室と一緒に問題の一つずつ整理していくことで眠れるようになり心の負担が半分になったそうです。

先日の医学生の地域実習でAさんが医学生と私たちに伝えてくれた大切な言葉があります。「医療をされるみなさんにお伝えしたいことがあります。心にひとつでもいい、優しさの種をうえてください。そうすれば言えなかった十のことの一つでも話すことができます。そうすれば患者は安心して信頼関係が生まれます」。

AさんからSDH（健康の社会的決定要因）が折り重なる人生を聞いた医学生は最後にこの言葉を聞いて大粒の涙を流しました。

Aさんと医学生から医療従事者としての初心を思い起こされた出来事でした。

昔の人は、燕のさえずりが「土食って、虫食って洪一い」と聞こえていたそうです。このことは、春の新しい発見でした。

困りごとを抱えた人と出会うと、その人の嫌な一面しか見えない、いや見ていないことがあります。でも、燕のと同じように、その人のことを知り、違った角度で関心を持つて見ることで、素敵な一面を発見できると思います。今日も、誰かのいいところ探しをしていきます。



県連ソーシャルワーク委員会報告

医療生協健文会山口市事務所がいよいよ動き出す運びとなり、山口市でのソーシャルワーク活動を確認しました。歯科では**6月8日**に助産師と歯科衛生士でおこなう「**子育てサロン**」が開催されます。このような歯科の貴重な取り組みに注視しつつ歯科との連携を検討します。

また今回から上宇部クリニックの宮本師長が参加することになり委員会がさらに強化されました。